竹靑（蒲松齡「聊斎志異」柴田天馬譯）

［やぶちゃん注：昨年の五月に始めながら、既に一年近く更新をしていない[ブログ・カテゴリ「聊斎志異」](http://onibi.cocolog-nifty.com/alain_leroy_/cat23713038/index.html)の底本を、公開のもＰＤＦ横書版とワード文書縦書版とすることにした。

　は、ルビ・タグでブログ公開することが、異様に労多くして実少ないと感じたである。しかも私のブログではルビ・タグを含むＨＴＭＬテクストを一寸でもそうとしようもんなら、がぐちゃぐちゃになってしまうのである。当初、ＰＤＦ縦書のみで考えたが、一部の漢字が横転するのが如何にも気持ちが悪い。そもそもが天馬訳を横書で読むこと自体が私に言わせれば、だからでもある。

　次に、底本の問題である。

　実は電子化を始めた直後に、toumeioj3氏のブログ「武蔵野日和下駄」の[「柴田天馬訳の聊斎志異について(2)」](http://d.hatena.ne.jp/toumeioj3/20121108/p1)を図らずも、そこで天馬氏の訳文が、角川文庫版ではこれ、実におぞましいほどに、いじられ、改変されている事実を知ったからである（これは最早、改竄と断じてよい）。それで実は、一気に底本としていた角川文庫版へのが失せ、同時に、「聊斎志異」電子化のも完膚無きまでに折れてしまったというのであった。……週に一度、妻のリハビリの迎えに下界に下りるだけのたる私は、この数年、新たにを求めること自体をしなくなっており、新たに先行する天馬訳の諸本を入手して仕切り直すというようななも動かなかったのであった。……

　そのうち、、ふと、すっかり御厄介になっている国立国会図書館の近代デジタルライブラリーの中に、乍ら、戦前のの天馬訳があることを知り、漸くやる気がたという訳である。

　かくして底本は、同ライブラリーの大正一五（一九二六）年第一書房刊に変えた。しかも、正字正仮名版であって、その点でもこれ、しても頗るくんである。

　踊り字「〱」「〲」は正字化した。但し、底本は総ルビであり、これはまた、まともにやるとなると、とんでもなく時間がかかるので、天馬訳の真骨頂の箇所、及び、難読或いは読みが振れると私が判断したもののみのパラルビとしたことはお許し願いたい。但し、原文と照応させてみて明らかに意味が通らず、誤植と断ずることが出来たものは注せずに訂した（例えば、原文が「兩月」であるのに「」とあるようなケース）。最後の注は本文とは一行空けて配した。原典ではポイント落ちで各注一行が二字下げ、二行目以降は一字下げであるが、本文と同じにした。出来上った形は頗る角川文庫版にだが、遙かにな天馬訳の電子化であると私は秘かに自負しているんである。原文は従来通り、中文繁体字の「維基文庫」から引いている（柴田氏が底本としたものとは微妙に異なる箇所がある）。……しかしルビ附けが面倒なことには変わりがない。これも次の回の公開が何時になるかは知れぬ。……

　手始めに、如何にも御洒落な色塗りでし、不遜にも中国人に読んでもらうことを末尾で望んでる太宰治の訳や、田中貢太郎訳など、電子テクストがごろごろしている「竹青」を、ここで敢えて持ってくることにした。この如何にも大陸的なな、而してなところはしっかり濡れてる天馬氏のそれと、是非とも比較して戴きたいためである。なお、本「竹靑」では例外的に第一段落目の「呉王廟」の後に（　）本文中にポイント落ちの二行割注が入るが、同ポイント（　）で示した。【二〇一五年六月二十日　藪野直史】］

　竹　靑

　は湖南ので（とのみで話した者は郡やを忘れて居た）家がたいそう貧しかつたから、文官試驗に落第して、歸つて來る途中でがきたけれどくのは、羞かしくて出來ず、くてるので歩く力はなし、暫く（呉王廟といふのは三國時代の呉の虎臣と云はれた甘寧將軍を祀つたもので、楚江の宮池鎭の水邊にあるのださうだが、廟の傍への林には數百の烏が棲んで居て、廟前を通過する客船を二三里も前から出迎へ、帆檣の上で群がり噪ぐ。すると船の客人達は水路の平安を守つて下さる呉王の神鴉だといふので、思ひ思ひに肉を空中に投げ上げる。それを一つも堕さずに接けて喰ふのがなかなかの奇觀ださうだ。呉王廟が江畔にあるといふことゝ、客船が廟の前を絶えず來往することが先づ頭にはいつて居ないと、興味が少ないから此註だけは本文に挿入する）の中でんで居た。、神樣を拜んでを訴へ廊下にて臥つて居ると、一人の人がをれてにえ、いて、

「黑いが堕ちて、が一になりましたから男を補充致しませう」としあげた。が、おしになる、黑いを授かる、身に、つける、忽ち化してとなる、をして出て見ると、一の烏が居たのでになつて飛んでつた。烏どもは、多くのに分かれて集まり、舟の上のが爭つて肉をてくれるのを、空中に群りながら、けて食ふのである。それでをして居るくなつたから、翔んでのにり、に得意で居た。二三日るとがの無いのを憐れに思つて雌をしてくれた。それはとふので、に愛し合つて、樂しく日を送つた。

　はを取るのに、もすると馴れてをしないから、竹靑はめるのであつたが、うかなかつた。兵士が船でつた。に竹靑がへてつたからまらずにすんだのである。烏の群は怒つてをして波をつたので、波が湧き起こって、舟は、な覆へつた。竹靑は、餌をつてきては、をくんで居たが、の、かつたので、ででしまつた。、夢のに眼が醒めて自分はの中に臥つて居るのであつた。

　是より先き、はの死んでるのを見出したがだか分らない。撫でて見るとだつても居ないので、人をて置いた。それが今生きかへつたので、訊ねて事情を知り、をめて送り歸した。

　三年の後である。は、の場所を通つたので、呉玉廟に參詣し、を供へ、烏を呼び集び集めてさしてやつた。て、

「竹靑がに居るならあとにまつておいで」

といつてつたが、食べてと、んでつた。竹靑は居なかつたのであろう。ちり歸りに復た呉王廟につをげた。てなをへて烏の友を饗応し、又同じやうにつたのであつた。舟をに繫いで一宿したが、つて居ると、のに、りと落ちたものがあつた。の美しい人である。して、

「お別れまをして」

とた。が驚いてねると、

「、竹靑を」

といふ。魚は喜んでから來たかとねた。麗しい人は曰うた、

「は漢江のになつてますから、故郷に歸つて來ることは、なんです、けれどごろ、鳥のがものお情けをさうました來てるのです」

　魚は益々欣び感じた。ど久しく別れて居た夫妻のに、しさ戀しさにへぬのである。そこではに南へ行かうとる、女は、に西へ行かうとる、とも決まらずにると女は起きて居た。目を開けて見廻すと、の中に大きながとかがやいても舟ではない。驚いて起きて來て、

「は、だ」

と、ねる。女は笑つて、

「此は漢陽なん。のはとりもなおさずのではありませんか。南へかなければならないこともなでせう」

　と曰つた。になると、やが集つての用意がた。廣いの上にいをて、夫婦さしひで飮むのである。魚が、の所在をねると、に居ますと答へた。が久しくは待たないだらうとが心配すると、女は言つた、

「ん。がのためにをしますヨ」

　したりをしたりして樂しんで居た。そして歸るのを忘れて居た。

　は夢が醒める漢陽だから、非常にいた。は主人を訪ねてみたが、としてがない。は、へかうとしたがが結ばつて解けないのでうとに、舟を守ることゝなつた。

　餘り過ぎた。は歸りたいと思つて女に謂ふには、

「が此に居ると親戚との仲もてしまふ。らずはとの名ばかりで一度もをないのはだ」

　女は曰つた、

「がのを、そんなにらないで下さい。ひけるにしてものにはが有るではありませんか。あたしを、の、も、を此に置いてのにした方がでせう」

　生が、道が遠くて時々ることが出來ないからとがると、女は黑いを出して曰つた、

「ののがります。のことをひ出した時には、此を、ればられますし、しつたらのために之をしてあげませう」

　で、に珍しいをらへてのためにをした。、醉つて寢てしまつた、醒めるとは舟のにある。、洞庭のの泊り場所で、も、も俱にた。視てにき、往つて居た所をねるので、生は、とげにりした風を見せた。枕のに一つのがあるのをめると、女のれた新しいややなどで、黑いもり、んで、其中に置いてあつた。又をしたが腰のにであつて、それを探るとが一杯充ちて居た。南に向つて出發し、にいてからにのをして去らしめた。

　家に歸つて數箇月を經た。く漢水のことが憶はれる濳かに黑いを出してた。兩脇に翼が生えてに空をいで飛んで行き、ばかり經つと漢水に達して居た。ながら低くつて見るとの中に一のがある。で、飛び降りた。が、てて曰つた、

　「が、になりました」

　竹靑が出て來てにけ、生のために、黑いの結び目を緩めさした。のきものがと脱げる。手を握つて中へはいつてさう曰つた、

　「いところへになりました、はさうなんです」

　生はにねて曰つた、

　「胎生かネ、卵生かネ」

　「は今では神になつてるんです、皮も骨もつて、はひますヨ」

　數日を經てから果して胎生の子供を産んだ。が厚くんで居てきなのであるのを破つて見ると男のであった。生は喜んでと名をつけた。三日のち漢水の神女たちがや珍らしい物を贈りものとしてひにたが、なでく、三十以上の女はなかつた。一同に入つてにむかひ、での鼻をで、名まえをとつけた。つてしまつてから生が、

　「あれは、なヱ」

　と、ねると女が曰つた、

　「な、のです。の、をて居たのでを解いた仙女なんです」

　數箇月して女が舟で送つて呉れた。船は帆やを用ゐずに飄然とでに行つた。につくと人が馬をにいで俟つて居た。生は歸つた。は絶えず往來して居たが、數年を經ると、漢産は、益々になつたので生は大そう可愛がつた。妻のがのないのを苦にして一度漢産を見たいとつて居る事情を生が女にたので女はをへ、父と一緒にを歸へしてやつた。それはのといふ約束であつた。歸つて來ると和氏はの産んだ子以上に可愛がり、餘りになつたけれども返すに忍びないといつて返さずに居た。するとかに病氣となつてした。和氏のはである。生は、で女にふために漢水につた。門をると、漢産はのまゝでの上にで居る。喜んで女にねると女は曰つた、

　「が、久しく約束にいていらつしやるので、はがなつかしくなりましたからせたんです」

　、和氏がを可愛がつてるといふことを生がすと、女は曰つた、

　「がるのをお待ちなさい」一年餘りすると女は男と女のを生み、男を女をと名づけた。生は漢産をて歸つたが、に二三度は漢水に行くのでであるといふところから漢陽にた。漢産は、十二の年に郡のにはいつた。女は人間には美くしいの女がいないと言つて漢産を招いてをらせ、そして歸してよこした。の名はといつてり神女の産れである。ち和氏がだので、漢生も妹も、な來してんだ。葬式がでから漢産は家にり、生は漢生玉佩をれつたが、此れからは返らなかった。

（一）左傳の二十四年にとある。人の非行をめつゝ自分もそれにふといふことである。

（二）の逍遙遊にたりとある。腹がくちくて減つて居らぬといふこと。

（三）とは羊と豚を供へること。

（四）列仙傳に、といふ人がで二人の仙女が大きなつのをて居るのを見てそれを下さいといつたら仙女は解いて鄭に與へた。鄭は少し歩んでつて見たら仙女の姿は見えなかった。そして珠も矢張りなくなつてしまつたといふことが出て居る。

（五）のにてとある。とは、をつてしみ、とは足ずりしてむのである。

竹青

　　魚容，湖南人，忘其郡邑。家貧，下第歸，資斧斷絕。羞於行乞，餓甚，暫憩吳王廟中，拜禱神座。出臥廊下，忽一人引去，見王，跪曰：「黑衣隊尚缺一卒，可使補缺。」王曰：「可。」即授黑衣。既著身，化為烏，振翼而出。見烏友群集，相將俱去，分集帆檣。舟上客旅，爭以肉向上拋擲。群於空中接食之。因亦尤效，須臾果腹。翔棲樹杪，意亦甚得。踰二三日，吳王憐其無偶，配以雌，呼之「竹青」。雅相愛樂。魚每取食，輒馴無機，竹青恆勸諫之，卒不能聽。一日，有滿兵過，彈之中胸。幸竹青啣去之，得不被擒。群烏怒，鼓翼搧波，波湧起，舟盡覆。竹青仍投餌哺魚。魚傷甚，終日而斃。忽如夢醒，則身臥廟中。先是，居人見魚死，不知誰何，撫之未冷，故不時令人邏察之。至是，訊知其由，斂貲送歸。後三年，復過故所，參謁吳王。設食，喚烏下集群啗，祝曰：「竹青如在，當止。」食已，並飛去。後領薦歸，復謁吳王廟，薦以少牢。已，乃大設以饗烏友，又祝之。是夜宿於湖村，秉燭方坐，忽几前如飛鳥飄落，視之，則二十許麗人，囅然曰：「別來無恙乎？」魚驚問之。曰：「君不識竹青耶？」魚喜，詰所來。曰：「妾今為漢江神女，返故鄉時常少。前烏使兩道君情，故來一相聚也。」魚益欣感，宛如夫妻之久別，不勝懽戀。生將偕與俱南，女欲邀與俱西，兩謀不決。寢初醒，則女已起。開目，見高堂中巨燭熒煌，竟非舟中。驚起，問：「此何所？」女笑曰：「此漢陽也。妾家即君家，何必南！」天漸曉，婢媼紛集，酒炙已進。就廣床上設矮几，夫婦對酌。魚問：「僕何在？」答：「在舟上。」生慮舟人不能久待。女言：「不妨，妾當助君報之。」於是日夜談讌，樂而忘歸。舟人夢醒，忽見漢陽，駭絕。僕訪主人，杳無音信。舟人欲他適，而纜結不解，遂共守之。積兩月餘，生忽憶歸，謂女曰：「僕在此，親戚斷絕。且卿與僕，名為琴瑟，而不一認家門，奈何？」女曰：「無論妾不能往；縱往，君家自有婦，將何以處妾乎？不如置妾於此，為君別院可耳。」生恨道遠，不能時至。女出黑衣，曰：「君向所著舊衣尚在。如念妾時，衣此可至；至時，為君解之。」乃大設肴珍，為生祖餞。即醉而寢，醒，則身在舟中，視之，洞庭舊泊處也。舟人及僕俱在，相視大駭，詰其所往。生故悵然自驚，枕邊一襆，檢視，則女贈新衣襪履，黑衣亦摺置其中。又有繡橐維縶腰際，探之，則金貲充牣焉。於是南發，達岸，厚酬舟人而去。歸家數月，苦憶漢水，因潛出黑衣著之。兩脅生翼，翕然凌空，經兩時許，已達漢水。回翔下視，見孤嶼中有樓舍一簇，遂飛墮。有婢子已望見之，呼曰：「官人至矣！」無何，竹青出，命眾手為緩結，覺羽毛劃然盡脫。握手入舍曰：「郎來恰好，妾旦夕臨蓐矣。」生戲問曰：「胎生乎？卵生乎？」女曰：「妾今為神，則皮骨已硬，應與曩異。」越數日，果產，胎衣厚裹，如巨卵然，破之，男也。生喜，名之「漢產」。三日後，漢水神女皆登堂，以服食珍物相賀。並皆佳妙，無三十以上人。俱入室就榻，以拇指按兒鼻，名曰：「增壽」。既去，生問：「適來者皆誰何？」女曰：「此皆妾輩。其末後著藕白者，所謂『漢皋解珮』，即其人也。」居數月，女以舟送之，不用帆楫，飄然自行。抵陸，已有人縶馬道左，遂歸。由此往來不絕。積數年，漢產益秀美，生珍愛之。妻和氏，苦不育，每思一見漢產。生以情告女。女乃治任，送兒從父歸，約以三月。既歸，和愛之過於己出，過十餘月，不忍令返。一日，暴病而殤，和氏悼痛欲死。生乃詣漢告女。入門，則漢產赤足臥床上，喜以問女。女曰：「君久負約。妾思兒，故招之也。」生因述和氏愛兒之故。女曰：「待妾再育，令漢產歸。」又年餘，女雙生男女各一：男名「漢生」，女名「玉珮」。生遂攜漢產歸。然歲恆三四往，不以為便，因移家漢陽。漢產十二歲入郡庠。女以人間無美質，招去，為之娶婦，始遣歸。婦名「巵娘」，亦神女產也。後和氏卒，漢生及妹皆來擗踊。葬畢，漢生遂留；生攜玉珮去，自此不返。